

## 卒業式校長の話

### (1) 全日制 卒業式 校長の話 平成 28 年 3 月 5 日

卒業生のみなさん、卒業おめでとう。保護者のみなさま、お子様のご卒業心よりお祝い申し上げます。おめでとうございます。また、本日は神奈川県議会議員守屋てるひこ様、同窓会長 小野康夫様をはじめとたくさんのご来賓のみなさま、ご多忙な中を本校全日制卒業式にご出席いただきましてほんとうにありがとうございます。心より御礼申し上げます。

さて、卒業生のみなさん。小田原高校を卒業するにあたり、校長から二つのテーマでお話します。ともに、これから社会人として生きていく上で、しっかり自覚してほしいことでもあります。

まず一つ目は、私の個人的な用語法になりますが「Beruf」をしっかりとつという話です。

さて、まず次の質問にどう答えるか考えてみてください。

宮沢賢治は何でしょう。誰ではなく、何でしょうという質問です。Whoではなく、Whatです。

何でしょうという質問は普通、職業などを問う問い方です。答えとしては、詩人、文学者、小説家、哲学者という答えが聞こえてきそうです。しかし、もし同時代人に宮沢賢治とは何かと問えば、ある時期は花巻農学校の教師、またある時期は東北砕石工場技師という答えが返ってくることでしょう。私はこの違いをBerufとJobという概念で区別しようと思います。

同様のことを石川啄木で考えて見ましょう。Berufで言うなら、詩人、歌人でしょう。しかしJobで見ると、浜民尋常高等小学校代用教員、小樽日報や函館新聞の記者ということになります。

我々は社会生活を送る上で、何らかの職業に就きます。職業だけでなく、地域の自治会役員やPTA役員などの役職につくこともあります。このように社会的に割り当てられた仕事をJobと考えます。これに対して、私がBerufと呼ぶ概念は、その人間の本質を捉える言葉です。職業や立場とは関係なく、その人の本質を捉える。本質として詩人なのか、本質として哲学者なのか、文士・文人さらには科学者・ミュージシャンなのか。Jobには定年退職や転職がありますが、Berufに定年はありません。

さてみなさん。ここで言うBerufを問われたときに、自分なりに応えることができるのでしょうか。なかなか難しいことだと思います。しかし、人として生きていて、Berufを持たずに生きることは大変残念なことです。詩人、哲学者、文学者、俳人、歌人、その他、どういうカテゴリーでもいいから、自分の本質を言い表すBerufを持ってください。持つ志を抱いてください。

自分にはそんな高尚な概念で自分を言い表すことはできない。自分にBerufは無縁だと思う人がいたら、その人に伝えたいことがあります。BerufはJobを極める、突き詰めることで形成することもできます。

私は現在教員です。教員という言葉は、教員採用試験などと使われるように法律用語です。ですから一定の手続きを踏めば教員になることはそんなに難しいことではありません。しかし、教育者という言葉は、私にとってBerufだと思っています。教員になることはできるが、教育者になるのは難しい。教科指導だけでなく、人格識見兼ね備え、教え子の尊敬を受けるに相応しい教員は、Berufとしての教師になると思います。

同様の例は、銀行員と銀行家（バンカー）、公務員と「官僚」の関係で見ることができます。

このように、職業を極めることでもBerufにたどり着くことができると思います。

いずれにしても、みなさんには、これからの人生、自分のBerufは何か、どのようにBerufを形作るか考えながら進んでいってほしいと思います。

二つ目の話は、「上に立つものには相応の義務がある」ということです。

ノブレス＝オブリージュという言葉があります。

貴族は義務を負う。これが直訳です。古代ローマでは貴族（パトリキ）が私財で公共事業を行うことが

不文律としてあったといいます。アッピア街道を建設した貴族アッピウスの例は大変有名です。血統貴族ではないが、社会の上に立つ者の心得としてみれば、合衆国で富豪が多額の寄付を行ったり、ボランティアを行うことが慣習として存在することも、その表れといえます。

きみたちは社会に出て、いずれリーダーになっていくと思います。またそうであってほしい。リーダーとは会社で出世することだけを意味しているわけではありません。さまざまな場面でリーダーは必要であり、リーダーシップとフォロアーシップは大切です。地域社会でも家庭でも。

今の日本の教育で欠けているものの一つがリーダー教育であるかもしれません。小田原高校を卒業するきみたちに、最後に投げかける言葉として、このノブレス＝オブリージュという言葉を選んだのはそうした危機感がわたしにあるからです。

ノブレス＝オブリージュ、私の意識は「上に立つものには義務がある」です。この一言はシンプルだが大変重く思っています。

昭和45年以前 旧「船員法」第12条に、『旅客・海員その他船内にある者を去らせた後でなければ自己の指揮する船舶を去ってはならない』と定められていました。

海上にあって、船は一つの社会であり小さな国家といってもいい。その船を安全に航行させるため、船長には強大な権限が付与されています。であるがゆえに、船長にはリーダーとしての義務がある。それが船長の最後退船義務となっていたわけです。

真のリーダーとしての心構え、そんなに難しいことはありません。ノブレス＝オブリージュ。上に立つものには義務がある。それを真摯に肝に銘じることができるかどうかだと思います。

さらに言えば、知行合一。知るだけではだめです。行動に移して初めて真に知ったことになる。これは世界史の授業の中では陽明学の中核となる考え方ですね。知ることは行動すること。実際に行動してこそ、知ったことになる。これからの人生で、ぜひノブレス＝オブリージュを実践してほしいと思います。

以上、卒業に際して、私からの言葉とします。「Beruf」と「ノブレス＝オブリージュ」、生涯心に留めておいてほしいと思います。

卒業おめでとう。みなさんの活躍を心から祈念いたします。

(2) 定時制 卒業式 校長の話 平成 28 年 3 月 4 日

卒業生のみなさん、卒業おめでとう。保護者のみなさま、お子様のご卒業心よりお祝い申し上げます。おめでとうございます。また、本日はたくさんのご来賓のみなさま、ご多忙な中を本校定時制卒業式にご出席いただきましてほんとうにありがとうございます。心より御礼申し上げます。さて、卒業生のみなさん。小田原高校を卒業するにあたり、一つお話ししたいと思います。

トーマス・エジソン おそらくその名前を知らないという人はいないことでしょう。アメリカの大変有名な発明家で、蓄音機（後のレコード、今のCDの元祖）、白熱電球、活動写真（映画の元祖）など彼が発明し、現在の我々の生活に深く関係しているものは数知れません。

私がここで紹介したいのは、彼が少年時代には学校という枠に入りきれなかった、大変個性的な子どもだったことです。個性的、というのは美しい言葉です。実際は、学校から迷惑がられ、ついにはたった3ヶ月で小学校を退学しなければならなくなります。

彼は子どものころから、素朴な疑問をいだと、そのままにしておけないタイプの少年でした。

1 + 1 は 2、誰でも当たり前と思うことにすら疑問を投げかけます。粘土 1 個と粘土 1 個をくっつけても、粘土 1 個の塊になる。1 + 1 は 2 ではないじゃないか。

アルファベットの A はどうしてエーというの？なぜピーと発音しないの？

彼の疑問は実践にも繋がります。ガチョウの卵を孵化させる過程を知りたくて、実際にガチョウ小屋に寝泊りして卵を温めたり、どうして物が燃えるのかという疑問から藁を燃やしていたら、自宅の納屋を全焼させてしまったり。失敗は数知れません。そんなエジソンでしたから、ついに小学校の担任の先生から「おまえは頭がおかしい」とまでいわれます。エジソンを必死になってかばうのは母親だけでした。小学校の校長先生は、「お母さん、そんなに言うなら、お母さんが教えればよい。学校は面倒見ません」と言われ、退学するのです。

大人になってからも、けっして順調にいったわけではありません。しかし最終的に彼は発明家として歴史に残る発明を数え切れないくらい残し、歴史に偉人として名を連ねます。

小学校という枠に入りきれなかった彼でしたが、学校だけがすべてではなかったわけです。

エジソンが発明家として成功した理由、いくつもあると思います。しかし、私はエジソンを信じ、エジソンの能力を最後まで否定しなかった母親の愛情が大変大きな意味を持っただろうと思います。母ナンシーはエジソンの科学への好奇心を満たすための援助は惜しみませんでした。家の地下室をエジソン専用の実験室として与え、薬品類を買い与えたといいます。

彼を信じ、彼を支える人がいた、それが後のエジソンを作ったのだと思うのです。

「母が私の最大の理解者であった。母が居なければ私は発明家になっていなかっただろう」エジソンは後世そのように述べています。

みなさん

みなさんの中には、ひょっとして学校の勉強がそんなに得意ではない人がいるかもしれない。エジソンほどでないけれど、学校という枠に入るのが苦手な人がいるかもしれない。しかし、人にはそれぞれ必ずよいところがあるものです。そして、そのよいところを見つけてくれる人、よいところを信じて支えてくれる人がいると、大変心強いと思います。エジソンには母親というよき理解者がいました。母親はエジソンを信じ、支えてくれました。

皆さんにはもちろん、暖かくみなさんを支える家族がいます。しかし、きみたちを信じ、支え、期待しているのはご家族だけではなのだということを、卒業にあたりここで伝えたいのです。

きみたちに深い愛情を持つ人がいるということを断言して、きみたちを世の中に送り出したいのです。それは誰か。

私は、校長として定時制の生徒について、さまざまな場面で担任の先生から、教科担当の先生から、部活顧問の先生から、さらには養護教諭や学年主任、その他さまざまな場面できみたちと触れ合う多くの先生がたから、きみたちの日常について報告を受けてきました。

その中で一つだけ気づいたことがあります。どのような場面でも、生徒がどんなに深刻な問題を起こしたときも、うちの定時制の先生がたで、誰一人「この生徒はだめです」「もう見込みはありません」というような報告をする先生はいなかった。それどころが、必ず生徒ひとりひとりの良いところを見つけ出し、この生徒にはこんな素晴らしいところがある、こんな光るところがあると、校長に必死に説明する先生がたの姿がいまでもたくさん思い起こすことができます。

きみたちはエジソンである。学校という枠に、場合によってはこれから、会社という枠にうまく入りきれない、収まり切れないで苦しむ場面が来るかもしれない。

きみたちはエジソンです。未来のエジソンです。エジソンには母親という、最後まで彼を信じて、彼を見つめ続ける優しい存在がありました。だからエジソンはエジソンになれた。きみたちにも優しいご家族がいることと思うが、それに加えて、君たちを信じ、君たちのよいところ、光るところを見つけ出し、そのきみたちの未来を信じている先生がたが、この小田原高校定時制にはいるのです。そのことを心に刻んで、巣立って行ってほしい。そう思います。

最後に、エジソンの有名な言葉で締めくくります。天才とは1%のひらめきと、99%の汗（努力）によって生まれる。

人間、天才である必要はありません。人生とは1%の才能と、99%の努力からなっている。私はそう訳したいのです。自分の環境やテストの点数を嘆くことなかれ。99%の努力を怠らなければ、必ず結果はついてきます。

卒業おめでとう。これからの人生、君たちの活躍を信じ、心から応援しています。